

「あひゞき」と人情本

青島千恵

—

成語、熟語、凡て取らない。僅に参考にしたものは、式亭三馬の作中にある所謂深川言葉といふ奴だ。「べらぼうめ、南瓜畑に落ちた風ぢやあるめえし、こうひツからんだことを云ひなさんな」とか、「井戸の釣瓶ぢやあるめえし、上げたり下げたりして貰ふめえぜえ」とか、「紙職の鐘馗といふもめツけへした中揚げで折がわりい」とか、乃至は「腹は北出しぐれ」の、「何で有馬の人形筆」のといった類で、いかにも下品であるが、併しボエチカルだ。俗語の精神は茲に存するのだと信じたので、これだけは多少便りにしたが、外には何にもない。尤も西洋の文法を取りこまふといふ氣はあつたのだが、それは言葉の使ひざまとは違ふ。¹⁾

二葉亭四迷の書いた言文一致体の小説『浮雲』について、自身がこのように述べていることから、新しい文体創造にあたり、彼が近世会話体小説を参考にしたことは明らかである。二葉亭の両親は文学的素養には縁の薄い人たちでありながら、三味線で常盤津を嗜んだということが知られており、そのような環境で育った二葉亭も「顔に似合はない粹な人で、学校に居た時から常盤津や清元が解つた程純粹の江戸つ子趣味でした。」と、太田黒重五郎は回想している。このように江戸文化には文学以外でも親しんでいたことがわかるのだが、また、坪内逍遙からの影響で「八文字屋ものなどを借りて讀んだ、その外、艶道通鑑や三馬の著作殊に風來山人の文章には敬服して愛讀して居た。」と、江戸の談義本あるいは戯作をよく読んでいた。²⁾

そのような文学的背景とともに二葉亭が近世会話体小説を参考にした理由としては、江戸庶民が話していたいわゆる「俗語」による会話からは、その発言者の身分・思惑・会話をしている相手との人

間関係など、多くのものが読み取れるからであり、直接話法という方法によって、現実の会話行為を真似ると同時に、その庶民生活の「写実」的な再現が可能であるとする考えが提出されている。当然ながら、これは次の「平凡」の言説が前提とされるものであろう。

文學上では私は寫實主義を執つてゐた。それも研究の結果寫實主義を是として寫實主義を執たのではなくて、私の性格では勢ひ寫實主義に傾かざるを得なかつたのだ。

寫實主義については一寸今の自然主義に近い見解を持つて、此様な事を言つてゐた。寫實主義は現實を如實に描寫するものではない。如實に描寫すれば寫眞になつて了ふ。現實の（眞とは言はなかつた）眞味を如實に描寫するものである。詳しく言へば、作家のサブジェクチュウキチー即ち主觀に攝取し得た現實の眞味を如實に再現するものである。

「写実」が「写真」ではない以上、既存の文学的テクストが、創作過程において何らかの形で介在してくるであらうことを、予測させる発言ともいえる。

前掲「余が言文一致の由来」の言に従つて、二葉亭が『浮雲』を書くにあたり、式亭三馬の滑稽本を参考にしたことは、林原純生氏によつて既に検証されている。林原氏は「大義名分や公的な存在理由を持たぬ人間が、外見や知識において背のびをし、結果、自己の位相を忘れ、自省力や自己認識の欠落した饒舌な人間の滑稽な姿が

表現される」「滑稽本の喜劇性」なるものを両者共有の屬性と見る。そして、その比較の理由を次のように表明された。

「浮雲」は滑稽本の方法を継承することによつて、したたかな処世的配慮や、現世的論理の世界を確認してしまつたと言え。その確認によつて、かえつて内海文三の内面的世界も説得力を持つのは無論である。しかし、その内面世界は、現世的論理にはみだされ、それゆえ、もはや現世的諸規制との決定的な対立はなく、安住の地であると言えるかも知れない。「浮雲」への共感が、その内海文三の、かかる経路をへて造型された内面的世界への共感にあるとすれば、「浮雲」が、いち早く、近代世界の机上練習を行い、様々な挫折や現世の錯綜に倦みつかれた人間の帰巢の場としての内面世界を発見した作品として、その点での先駆性を持ち続けるのならば、まず、検証されるべきは、饒舌と話術の滑稽本の方法であると思われるのである。

そういつた内容的類似性に立脚した方法に対して、文のスタイルの面に注意を喚起したのが小森陽一氏である。

二葉亭四迷は、独特な「ことば」の様式、「ことば」の内容よりはその形式——語の断絶、区切り方、引き延ばしやつかえなどの表現的イントネーション、方言や隠語などの特殊語彙など——によつて、話し手の個人的（多分に類型的ではあるが）

性格をとらえる三馬の方法に注目していたのである。種々雑多な形式をもつ「詞」を模写し、それを直接読者に提示するという三馬の方法の中に、二葉亭は人間のありのままの姿をとらえる小説の可能性を見ていたのである。

この指摘には賛意を表したいが、小森氏の言われるように「独特な「ことば」の様式」を問題にするならば、それは三馬のみの「様式」とはいえないだろう。われわれはもっと他に目をこらすべきではないのか。

二

『浮雲』とはほぼ同時期に書かれた二葉亭の作品に「あひゞき」がある。もとより翻訳作品であり、全く同列に論することは出来ないが、『浮雲』に近世会話体小説の影響が指摘される以上、これもその影響下にあったと想像するのもあながち強引な付会ともいえない。二葉亭自身が述べている翻訳の態度といえは、

されば、外國文を翻譯する場合に、意味ばかりを考へてこれに重きを置くと原文をこはす虞がある。須らく原文の音調を呑み込んで、それを移すやうにせねばならぬと、かう自分は信じたので、コンマ、ピリオドの一つをも濫りに棄てず、原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、譯文にも亦ピリオドが一

つ、コンマが三つといふ風にして原文の調子に移さうとした。殊に翻譯を爲始めた頃は、語數も原文と同じくし、形をも崩すことなく、偏へに原文の音調を移すのを目的として、(後略)

という発言がつとに有名であるが、その一方で、「あひゞき」に関しては、「あひゞき」の訳文は、前半の自然描写の部分がおおむね原文脈に忠実な逐語訳であるのに比して、後半のあひゞきの場面(ことに会話の部分)ではしばしばかなり自由な意訳がみられる。」と安井亮平氏によつて指摘されている。それでは意訳がしばしば表れているという会話部分では、二葉亭はどのように訳したのだろうか。

「あひゞき」は、「國民之友」第3巻25号(明治21年7月)、27号(同8月)に掲載された。なお、これは後に全面的に改訳されて、翻訳小説集『かた戀』(明治29年11月)に収録されている。原作はロシアの作家イワン・セルゲーヴィチ・ツルゲーネフ Иван Сергеевич Тургенев の短編集『獵人日記』«Замечания охотника» (1847-1851) の一篇«Счастье»で、「現代人」誌一八五〇年第11号に掲載された。ツルゲーネフの初期の作品に属する。『獵人日記』全編は「自分」が狩獵の途中にたまたま出会った人物・事件を読者に物語るという形式をとるが、「あひゞき」では白樺林の中で休んでいた「自分」が見た農夫の娘アクリーナ(「國民之友」本文では「アクリーナ」だが、本稿では引用部分を除いてアクリーナに統一する。)と従僕ヴィクトル(「國民之友」本文では「ヴ井クトル」だが、本稿では引用部分を

除いてヴィクトルに統一する。最後の逢瀬の物語である。ヴィクトルは同じ農奴の身でありながら、恋人アクリーナに対して得々と地主の旦那のように振る舞う。旦那と共に他の土地へ移ることにしたヴィクトルは最後の別れになるというのに優しい言葉一つかけない。アクリーナの方は純真で心底ヴィクトルに惚れており、彼の子供を妊娠しているのにもかかわらず、あつけなく捨てられてしまう。前半は初秋の白樺林の自然描写が中心となるが、後半はアクリーナとヴィクトルの会話が主軸となる構成をとっている。

ところで、小森陽一氏は『浮雲』を、人情本の会話の構造を脱構築する作品として分析してみせたことがある。また、二葉亭自身も「平凡」の中で、東京に出てきて「法律学校」に通う「私」の恋愛成熟度を述べるくだりで、次のようにいう。

私は是より先春色梅暦といふ書物を読むだ。一體小説が好きで、國に居る時分から軍記物や仇討物は耽讀してゐたが、まだ人情本といふ面白い物の有ることを知らなかつた。この知り初めが即ち此春色梅暦で、神田に下宿してゐる友達の間から松陰傳と一緒に借りて來て始めて讀むだが、非常に面白かつた。

また、「余の思想史」(明治41年刊)でも、次のように回想している。

私の文學修養の經歷といつても、文學的の學校に居つたとい

ふのでもなし規則だつた研究をやつたといふのでもない。まあ學校に居た頃に、教師の眼を偷んで机の下に『梅暦』などを展げて讀んで居たのが昂じて、とうく小説を書く様になつたのだから、別段これが經歷だと、話す程のこともない。

我々は右の二つの言から、『浮雲』よりは多少、叙情味のまさつた恋愛小説「あひゞき」に、人情本の影響をさぐるべきなのではないだろうか。具体的に言えば、彼の愛読した『春色梅暦』以下からの影響は見られないのか。

三

以下に、「あひゞき」と『春色梅暦』における文体あるいは叙述の比較を、「あひゞき」の出現順にこころみたい。◇は「あひゞき」初訳本文である。前述のごとく「あひゞき」には改訳があり、それについては逐次触れる事とする。露語原文とその訳については安井亮平氏の注釈に多大な恩恵を蒙つた事を明記しておく。そして、◆に『春色梅暦』からの引用。当然ながら二葉亭が手に取つたのは、近世版本ないしその後刷りと思われるが、本論文では『梅児譽美』初編(天保三、四年刊)、『春色辰巳園』初、四編(天保四、六年刊)は日本古典文学大系『春色梅児譽美』に拠り、また『春色恵の花』初・後編(天保七年刊)、『梅暦別英対暖語』初、五編(天保九年刊)は『梅児譽美再聞暖語拾遺』、『春色梅美婦欄』初、五編(天保十二、十三年刊)は明

治版帝國文庫『梅こよみ 春告鳥⁽¹⁵⁾』に拠つて、その各々の頁を付記しておく。ただし、ルビは省いた。また、今回は比較の対象を『春色恵の花』『春色梅児譽美』『春色辰巳園』『英對暖語』『春色梅美婦欄』の六作品に限つたが、便宜上それらをまとめて『春色梅暦』と称しているところがある。

◇「どんなに待ったでせう」と遂にかすかにいった。

◆長「誠にモウくどんなにいそいで來ましたらふ、ア、切ない
〔春色梅児譽美〕後編卷之五115頁

「あひゞき」は、アクリーナが白樺林ですつとヴィクトルが来るのを待っていたところによく彼が現れた時に言つた言葉である。『春色梅児譽美』の方は、丹次郎との再会を待ちわびていたお長が朝早く息せき切つて丹次郎の家を訪れたときに言つた言葉である。両方とも女が自分の愛する人との再会の約束を心待ちにしていたと言ふ心理的狀況とともにそれを表す言葉の表現が類似している。原文では、*“Jaano-ty, Viktor! Aneksaapaby……”*（ずつと前から來てました、ヴィクトル・アレクサンドルイチ）

◇「頼むぜ「アクリーナ」泣かれちやアあやまる。おれはそれが大嫌ひだ。」

◆藤「コウよしねへ延喜がわりいわな。泣でもらつちやア近頃氣の毒だ。（『春色梅児譽美』初編卷之三81頁）

「あひゞき」は、ヴィクトルの出立が明日と知つて泣くアクリーナに対してヴィクトルが言つたものの。『春色梅児譽美』は、藤兵衛と此糸との義理に挟まれて困つて泣く米八に対しての藤兵衛の言。状況は異なるものの両方とも男が女に泣かれる事に不快を示して言つたものである。「あひゞき」の原文では單に *“He maw.”*（泣くなよ）である。

◇「アラ泣はしませんよ」、トあわて、「アクリーナ」ハ云つた、せぐり來る涙を漸くの事で呑み込みながら。

◆長「イ、エ泣はしませんヨ」（『春色梅児譽美』初編卷之三88頁）

アクリーナもお長も相手の男に泣いているところを隠そうとする場面。この時のアクリーナの描写が「ブルくと震へて差うつむいた」とあるのに対し、お長の描写は「……さしうつむき、泪の露はひざのうへ、袖をくわへて身をふるわし……」とあり、身体的描写においても類似する。原文では、*“Hy, he Gyry, he Gyry.”*（ええ、もう泣きません、泣きませんたら）である。

◇「若しさうでもなつたらモウわたしの事なんざア忘れてお仕舞ひなさるだらう子」

◆よね「……おまはんマアそれよりか、今じやア私のことなんざア思ひ出しもしはお呉なさるまいネ。（『春色梅児譽美』初編卷之一49頁）

◆ 長「眞に私きやアおそろしく、こわいかなしい思ひをして、弁

天さまやお祖師さまへ、願をかけて、おまへさんをしたひま

すのに、おまへさんは私を、思ひ出してもおくんなさるまひ

◆ ね「春色梅児譽美」初編卷之三 85頁

長「アレお聞よ。うたにさへあのよふに唄ふものを、殊にお兄

イさんは米八さんがあるから、私のことはどふしても思ひ出

◆ してはお呉れじやアないヨ「春色梅児譽美」三編卷之七 147頁

由「……おまへさんは、わたくしのことはわすれてしまつて、

唐琴屋の此糸さんと、深い和合と、妹のお蝶が常々の噂……

◆ 「春色梅児譽美」三編卷之九 171-172頁

「あひゞき」は、アクリーナの、ヴィクトルが外国に行くかもし

れないと知つた時の言葉。『春色梅児譽美』49頁の例は米八が行方

の知れなかつた丹次郎に再会した時。85・147頁の例はお長が偶然に

丹次郎と再会した時。172頁はお由が藤兵衛と再会した時。いずれも、

長い間会うことができなかった恋人に対しての言葉であるのに対し、

「あひゞき」ではこれから会えなくなる恋人に対してである。状況は

少々異なるものの、両方とも会えない間にも自分の事を思つていて

欲しいと言う気持ちがかめられ、かつ相手の気持ちを試すような口

ぶりである。原文では、*“By menia zadlyute, Bykropy Aleksandry-*

ch. (あなたは私のことなんかお忘れになるんだわ、ヴィクトル・ア

レクサンドルイチ)、「若しさうでもなつたら」はない。二葉亭の意

訳である。ちなみに改訳では、「別れたら私の事なんぞ忘れてお了ひ

なさるだらうねえ」となる。

◆ 「ほんとに、「ヴィクトル、アレクサンドルイチ」、忘れちゃア
いやですよ。

◆ よね「わちきやアそればかり、案じられてならないヨ。斯し
て居さしつてもどふぞ時節は、私のことを思ひ出してお呉な
さいヨ「春色梅児譽美」初編卷之一 57頁)

「あひゞき」の方は、アクリーナが会えなくなつても自分のこと
を忘れないというヴィクトルの言葉に対して念を押すもの。『春色
梅児譽美』では、米八が、病気の丹次郎を残して帰らなければなら
ない時に会えない間の心変りを心配して念を押している。改訳では、
「ほんとに、ヴィクトル・アレクサンドルイチ、忘れちゃ厭よ」であ
り、より近代的な言い回しになった。

◇ 「こんなに お前さんの事を思ふのも、怨徳づくぢやないから
……

◆ 米「……だんく此間中のはなしでは、欲で今まで一処になつ
て居たわけでもなし、……「春色辰巳園」後編卷之五 317頁)

「あひゞき」は、アクリーナがヴィクトルに対して言つたもの。『春
色辰巳園』では、不幸な境遇となつた恋人のことで相談に来たおふ
さに対しての米八の言葉。原文は *“Мне, кажется, я на что вас проби-*

a, всё, кажется, для вас……”（一体どうしてあなたが好きになったのかしら、何もかもあなたがいればこそという気がするの。）であるのを意識している。

◇「だってこわいやうだもの」

◆※「まことにこわいやうでございますヨ」（『春色恵の花』巻之二 第三回13頁）

「あひゞき」は、アクリーナがヴィクトルに父親のいうことを聞けといわれて言ったもの。『春色梅児譽美』は、怪物でもでるかとお糸が怯えて言った箇所で、状況的には異なるが口調が似ている。原文は「Да страшно, Виктор Александровичъ」（でも、こわいわ、ヴィクトル・アレクサンドルイチ）である。

◇「ア、ヴィクトル、アレクサンドルイチ、どうかして一所に居られるやうにハ成らないもんか^子」

◆長「……その中にはどふかしてお兄いさんと、一所になられることもあるだらふかと、當もないことを便にして、……」（『春色梅児譽美』三編巻之七144頁）

アクリーナがヴィクトルとはもう会えないだろうと予感しつつの慨嘆。『春色梅児譽美』は、久しぶりに会った丹次郎の口から米八の名を聞き、お長ががつかりして言ったもの。原文では、「……как-

то будет нам быть без вас!」（一体どうなることでしょう、あなたがなくなったら!）とあるのを意識。改訳では、「あ、厭だ! お前さんに別れちや一日だつて辛抱が出来ない。」と、幾分原文に近付いている。

◇「アラモウちツとお出でなさいよ」ト「アクリーナ」は祈るやうに云ツた。

◆仇「アレサ丹さん、マアお待な。そんなにうろたへて歸らずとい、はネ。まだはなしがあるからもうちつとお出ヨ」（『春色辰巳園』初編巻之二265頁）

「あひゞき」は、「どれ歸らうか」と立ち上がり帰ろうとするヴィクトルを引きとめてアクリーナが言ったもの。『春色辰巳園』は、「おらアスしちやアあらねへ」といつて立つ丹次郎を引きとめる仇吉の言。原文では、「Пожмите еще немножко」（もう少しいてくれてもいいでしょう）。ちなみに、ヴィクトルの言う「どれ歸らうか」は、「Онико мне пора идти」（だが、もう帰らねばならない。）である。

◇「ヴィクトル、アレクサンドルイチ」トにじみ聲で「お前さんも……あんまり……あんまりだ」。

◆仇「丹さんそりやアあんまりだヨ」（『春色辰巳園』初編巻之二266頁）

「あひゞき」の方は、今が別れだというのにそれらしいことを何一つ言ってくれないヴィクトルに対してアクリーナが言ったもの。『春色辰巳園』は、真剣な自分の言葉をほぐらかす丹次郎に対しての仇吉の言。原文は「—вам грустно……вам грушно, Викторъ Александрычъ, събоды!」（あなたは罪だわ……罪よ……ヴィクトル・アレクサンドリイチ、本当に!）である。また「にじみ聲で」は後に「おろく聲で」に改められた。

◇「あんまりだわ、「ザ井クトル、アレクサンドリイチ」、今別れたらまたいつ逢はれるか知れないのだから、なんとか一ト言ぐらゐ云ツたツてよさ、うなものだ、何とか一ト言ぐらゐ……」

◆米「……それほどまでに私の前へ、氣の毒だと思つてくれる心なら、たとへ氣やすめにもおまへの口から、おれがわるかつた、切れてしまふから案など、たつた一口、言てきかしてくれるがい、じやアないかへ。『春色辰巳園』三編卷之八 366、367頁」

「あひゞき」は、アクリーナが何も言ってくれないヴィクトルを責めて言ったもの。『春色辰巳園』は、仇吉の事でひとめした後に、米吉が丹次郎に対して言ったもの。状況は異なるものの、その言葉の表現がいささか似通っている。原文では「今別れたらまたいつ逢はれるのか知れないのだから」の部分は単に「на прощанье」（お

別れに）となっている。また、「何とか一ト言ぐらゐ……」の後に「…мне… горькийной сиротинишке」（かわいそうに一人ぼっちになる私に）とあるのを省略しているのは、やはり人情本の口調に引きずられてのことではなからうか。改訳では、「だつて無情だわ。今が別れだといふのに、何とも言はないで。何とか一言位言つて呉れたつて可さ、うなものだ、一言位……」である。

◇「腹も立たないが、お前のわからずやにも困る……」

◆丹「……そりやア他人知らねへ妬心だからかまやアしねへが、思ひもつかねへことをいはれると、おいらも腹は立たねへが氣の毒だ（『春色辰巳園』初編卷之三 281頁）」

何か一言言つてくれと何度も頼むアクリーナにイライラしたヴィクトルが言ったもの。『春色辰巳園』では、仇吉の事で厭味を言う米八に対しての丹次郎の言葉。両方とも男が女に責められた後に言うという状況も一致。原文では「Я не сержусь」（怒っちゃいないよ）。で、いささかあいてを慰める口調となっている。

◇「……もとく女房にされないのでハ得心づくぢやないか? 得心づくぢやないか? ……」

◆丹「……たとへどういふわけにしても、おれが一生女房に持つふなんぞといふことは、ならねへ義理と知りながら……（『春色辰巳園』初編卷之二 262頁）」

ヴィクトルが自分とアクリーナの立場、生活の違いをたてにと言ったもの。『春色辰巳園』では、丹次郎が自分の気持ちを確かめてくる仇吉に言う言葉である。原文では単純に “Вери я на тебе же и отыск не могу” (お前とは結婚するわけにはいかないじゃないか。) である。

◇「今でさへ家にゐるのがつらくつてくならないのだから、是れから先ハどうなる事かと思ふと心細くつてくくなりやアしない」

◆ます「それでもつくく考へますと心細くなりますものヲ(『英対暖語』巻之三第五回 417頁)

◆蝶「ア、どうぞこれから姉さんや私の力になつてくくださいまし。まことにモウ心はそくつてなりません(『春色梅児譽美』三編卷之九 頁174)

「あひゞき」は、何か一言言ってくれと頼むアクリーナに腹を立てたヴィクトルに対する彼女の言。『英対暖語』は、宗次郎と一夜を過ごした増吉が宗次郎に対していった言葉。『春色梅児譽美』は、お由と藤兵衛の再会の後でお長が藤兵衛に対して言ったもの。原文では “но каково же мне теперь в семье, каково же мне? И что же со мной будет, что станет со мной, горемычной. За неимением выдалут сиротничку... Бедная моя головушка” (だけど、これで家の中でどんな立場に置かれるでしょう、どんな立場に。これから私はどうなるの

でしょう。かわいそうな私はどうなるのでしょうか。嫌な人の所へ一人ばつちの私はきつと無理やり嫁にやられてしまふでしょう。……なんて不幸なんでしょう。) であるのを、二葉亭はかなり意識したことになる。改訳では、「是から先は家に居るのが如何に辛いか知れやしない。私の身は如何なる事だと思ふと……屹度無理やりにお嫁に遣られて苦勞するに違ひないんだから、それを思ふと、私や……悲しくつて……悲しくつて……」とやや近代的な表現に変えている。

そのほかにも、状況的には違うものの、よく『春色梅暦』で使われている表現があるので次にあげてみよう。(もつとも、これらは近世後期戯作には頻出のものでもある。)

◇「知れた事サ」

◆丹「しれた事ヨ(『春色恵の花』巻之一11頁)

◆仇「それは知れたことヨ(『春色辰巳園』初編卷之三 280頁)

◆丹「しれたことヨ(『春色辰巳園』四編卷之十 393頁)

◇「だが已を得ざる次第ぢやないか? マア積つても見るがい、主「ナニサ隠すどこじやアね。此容だものを、よくつもつて見るがい、(『春色梅児譽美』初編卷之一 49頁)

◆よね「……それだけマアよくつもつてお見なせへな。(『春色梅児譽美』初編卷之三 81頁)

◆米「……マアよくつもつてお見ヨ。(『春色辰巳園』初編卷之一

250 頁

◇「アラかに……かにして頂戴よ」

◆米「……丹さん堪忍しておくれなわりいことがあるならこれから氣をつけるからエ丹さん（春色恵の花）二編巻之中52頁」

◆よね「……そんなら私がわりいから、堪忍しておくんなさいナ」（春色梅児譽美）初編巻之二57頁

◆米「丹さん、堪忍しておくれよ。（『春色辰巳園』三編巻之八366頁）

「かにする」は「かんにんする」の訛形「かんにする」の再訛であり、江戸戯作では「かんにんする」と両用で頻出する。ところが原文は「*He cepirech, Bykropy Alekshanych, ……*」（怒らないで、ヴィクトル・アレクサンドルイチ。）と単純である。

ここで改訳の問題についても少し触れておこう。改訳された箇所を数例あげてみる。

- | | | |
|------------|---|------------|
| ① 初 何だ馬鹿氣た | ↓ | 改 なんだべらぼうな |
| ② 初 方事に寄ると | ↓ | 改 ひよつとかすると |
| ③ 初 忘れハしない | ↓ | 改 忘れつこはねへ |

④ 初 なぜといって ↓ 改 何故つて

⑤ 初 見ええないよ ↓ 改 何も見えなくつてよ

⑥ 初 ちツとハ淋しからうサ ↓ 改 お前はなかく志ほらし
い所があるからなあ

①～③は俗語表現の強化された例であり、④・⑤はより近代的口調に変えられた例といえる。⑥は原文で、「*Hy, na, na, ty rosho re-ba rofpar*」（うん、そうだ、おまえは、まちがいなくいい娘だ。）とあり、改訳は相当原文に近づいたといえる。太田絃子氏が指摘するように「添削の傾向として、俗語などの適切な用語に替えられて優れた人物描写が行われて新稿の世界をすばらしくした語もある」¹⁷が、それは一般の傾向に過ぎない。いずれの変化にせよ、初訳↓改訳という図式に人情本的口調という観点を追加することによって、これらの変化の必然性が、より鮮明になってくると思われるのである。

四

これらの例からみて、二葉亭が「あひゞき」の訳出にあたり、人情本ないし『春色梅暦』ものから影響を受けていることは否定できないのではあるまいか。特に露語原文との相違は、訳文が原文固有の文脈・文体よりも、前代のこうした風俗小説に自ら接近してしま

う二葉亭の無意識的な筆法を露呈しているのである。すなわち彼の訳文は少なくとも男女の痴話喧嘩の直接話法に限っては、人情本的口調のフィルターを通過しなければ現出できない程であったといつてよい。

恋愛小説であり、心理的描写が情緒的であるという点において『滑稽本』よりは「人情本」、なかでも彼が最も親しんだ『春色梅暦』に接近したのはごく自然なことであろう。ここに表れている類似性を見る限りでは、意図的に『春色梅暦』の表現に似せたというよりも、既になれ親しんでいた『春色梅暦』の表現が無意識的に文章を書くにあたって選択されていたといったほうがよい。他言語で書かれた小説を自分の言葉に置き換えて行く翻訳という作業の中において「置き換える」という二元的作業行程であればこそ、既存の枠組みないし体系が侵入してきやすかったともいえるであろう。

注

- (1) 「余が言文一致の由来」『二葉亭四迷全集第4巻』（筑摩書房昭和60年7月）以下、本論文中の二葉亭四迷の作品はすべて筑摩書房『二葉亭四迷全集』による。
- (2) 太田黒重五郎「種々なる思ひ出」『二葉亭四迷全集第9巻』（岩波書店昭和40年5月）所収
- (3) 「余の思想史」『全集第4巻』所収
- (4) 林原純生「近世俗語文学と近代「写実」理念」『日本文学』（昭和56年1月）など参考
- (5) 「平凡」（明治40年東京朝日新聞連載）『全集第1巻』所収

〈付記〉

本稿は平成十一年度卒業論文（近世文学ゼミナール）として提出したものの一部に加筆したものである。

（あおしま・ちえ 平成12年度国文学科卒業）

- (6) 林原純生「『浮雲』と滑稽本」『国文学』（昭和53年12月）
- (7) 注6に同じ
- (8) 注6に同じ
- (9) 小森陽一「『浮雲』の地の文」『国語国文学研究』（昭和54年8月）
- (10) 「余が翻譯の基準」『全集第4巻』所収
- (11) 日本近代文学大系『二葉亭四迷集』所収 安井亮平注釈（角川書店昭和46年3月刊）
- (12) 「『浮雲』における物語と文体」『文体としての物語』（筑摩書房昭和63年4月）所収
- (13) 注11に同じ
- (14) 日本古典文学大系『春色梅兄譽美』（岩波書店昭和37年8月）
- (15) 帝國文庫「梅こよみ 春告鳥」（博文館明治26年8月）
- (16) 前田勇編『江戸語大辞典』（講談社昭和49年11月）
- (17) 太田絃子「二葉亭四迷「あひゞき」の語彙研究」『あひゞき』はどのように改訳されたか」（和泉選書平成12年3月）